



Title	イギリスの「モダン・ホーム」としての「コテージ」： ベイリー・スコットの言説と実作例の分析を中心に
Author(s)	吉村, 典子
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 78-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56367
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イギリスの「モダン・ホーム」としての「コテージ」 —— ベイリー・スコットの言説と実作例の分析を中心に ——

吉村典子／宮城学院女子大学

はじめに

コテージは、山村の小屋という意味合いや、都会と対峙する田園風景の中の、いわば感傷的な風景を構成する要素としてのイメージが強いが、イギリス19世紀末における住宅の議論や実作例を分析していくと、近代化における形象としてのそれが浮かび上がる。

この時代の前後の歴史を知る我々からすれば、コテージは、ヴィクトリア時代の歴史主義的様式論や装飾論、アーツ&クラフツ運動等を経てきた帰結としてそれをみることもできるが、当時の建築誌等をみると、「モダン・ホーム」を議論する項には、コテージが頻繁に登場し、イギリスの「モダン」を象徴的に示す要素を多分に含んでいることが確認できる。また筆者は、家族の近代化にともなう住宅の有りようをこれまで考察してきたが、その中で、今日我々が「リビング・ルーム」と呼ぶ空間の成立が、19世紀末のイギリスにあることを明らかにした。それは住宅全般を通しての考察であったが、特定の住宅範疇から再考すると、最も関係性が深いものとしてコテージがあげられる。

このことを端緒に、本研究では、特にコテージに関する言説や実作例が多数みられるが建築家ベイリー・スコットを例に、コテージとリビング・ルームとの関係性やイギリス「モダン」におけるその意義を明らかにする。

1. 近代までの「コテージ」

“cottage”という語は、古期フランス語からきていることからわかるように、ノルマ

ン人の征服以降、イギリスに定着していく封建制の土地や家屋にかかわる語であり、主には、労働者らが領主の敷地の端にもつ慎ましい家のことを意味した。やがてそれは18世紀の風景式庭園の高揚とともに、その風景を構成する要素として着目されるようになる。それらは、貴族層などの所有地や庭に、彼らの一時的な隠遁所として設計されることもあったが、主には労働者などを住ませるための家として使われた。

当時のコテージの「パターン・ブック」をみると、多くは平屋で、家族の誰もが使用する部屋が中心をしめる。かつては生産活動から寝食に至るすべての営みがこの部屋でなされていたが、この時代のコテージには、それに寝室が加えられ、寝室の部屋数が複数あるものは、2階も設けられた。この1階の主たる部屋を「リビング・ルーム」と当時の図面には記載されている。それ以前のコテージには部屋という分け方がなく、建物の内部それ自体が一つの空間（部屋）であり、そのため、部屋の名称も確立しなかったと考えられる。「リビング・ルーム」という語は、18世紀のコテージの図面から現われはじめ、また、OEDでは、1800年に入りようやく記載例がみられ、その殆どがコテージを論ずる出版物であることが確認できる。故に「リビング・ルーム」という名は、この時代のコテージ内の空間を指して使われ定着していった言葉であるといえる。一方で、同時代のカントリー・ハウス等の戸建て住宅や都市部の連続住宅等をもても「リビング・ルーム」という名称は使われていないことから、コ

テージ特有の部屋の名称といえる。しかしこの時は、この部屋自体の議論は殆どなく、風景となるべく建物の外観が関心の中心であった。

2、「モダン・ホーム」としての「コテージ」

以上のように、コテージは、主に貴族文化の中で発展していった側面があるが、産業革命後の中産階級の台頭とともに、この傾向は影を潜めていき、中産階級が担い手となって19世紀後半展開したアーツ&クラフツ運動等において、建築の土着性が強調される中で、コテージに対する関心が別の文脈で高まる。同時に、生産活動においては、工場制に対峙するかつての家内生産、つまり「コテージ・インダストリー」が見直されていく。これらには、実際の使用ということがあるにしても、ある意味では風景式庭園の中でのそれと同じように、ロマン主義的な絵になる風景としての要素が依然強い。しかし、時代がやや下り、一般的に「アーツ&クラフツ第二世代」といわれているようなスコットらは、実際の暮らしとの関係でその重要性を見いだしていった。

例えば、伝統的なイギリスの貴族の住まいは、もてなしの儀式的背景から、隣接する部屋と部屋の間にも直接行き来できるドアはなく、一旦ホールや廊下に出て移動する形式が中心であった。しかし、スコットは、家は「客をもてなすためにある」のではなく「家族がすまうためにある」という理念のもと、当時の主要な公室（ホール、ダイニングルーム、ドローイングルーム等）を直接行き来できるよう繋げていった。また、単に繋げるだけでなく、繋げてさらに広くなった部屋の中に、例えば「リセス」という奥まった部分をつくり、伝統的に来客時にしか使わなかったダイニングルームを、家族のための「ダイニング・スペース」として「リセス」におき、一緒に食事をするものどうしの近しい距離を

つくり出すことを可能にさせた。家族の近代化、つまり、夫婦や子の情緒的関係性の強まりや、家内領域と公共領域の分離により、公共とは異なる「家らしさ」が求められる時代の、住み手と家の物理的関係性をめぐる表現ともいえる。そして、こうしてつながった部屋を、「リビング・ホール」、さらには「リヴィング・ルーム」という名称を使って、スコットは図面に記載しはじめている。

リヴィング・ルームは、こうした比較的部屋数の多い住宅の改良プロセスの中で確立していった側面もあるが、今回のコテージの分析を重ね合わせると、そのモデルは、コテージにみる空間構成にあることも指摘できる。つまり、「かつては家それ自体が一つの空間で、家族の寝食すべてがそこで行われた」とスコット自身が言及した空間である。客のためではなく、家族のための住宅を構想する中で、かつてのコテージのような空間が念頭にあることがわかるし、実際、彼の設計の中で、「コテージ」としているものの図面をみれば、それらには必ず「リヴィング・ルーム」をおいている。換言すれば、1階の公室は「リヴィング・ルーム」のみ、あるいはそれが主となっているのが、彼が「コテージ」とする間取りの形式の一つといえ、家族の近代化の中で確立してきた形式といえるのである。

おわりに

「モダン・ホーム」としての「コテージ」は、イギリスの伝統的な住宅の、特に、間取りの形式をかえた表現といえる。その背景として、家族の集団性が強化され、非親族の排除とともに、公的機能や公共領域との分離が進み、家内、つまり、家の私的要素が意識されるなかで、スコットに代表される19世紀末の建築家等が、造形的に具現化した住宅の表現といえるものなのである。